

## ■保育士

社会福祉法人 晋栄福祉会 中之島ちどり保育園

まつもと まいこ  
松本麻衣子さん(28)

都会の現実のなかで、「未来」を育てている。大阪市北区天神西町のビルの一角にある「中之島ちどり保育園」。存在自体が「未来」である子どもたち。真新しい保育園で0歳児から5歳児までが、働き者のパパやママを思いながら頑張っている。夢に瞳を輝かす子どもたち。保育士の松本麻衣子さん(28)も、夢追い人のひとりだ。

(文 加文翔 / 写真 廣瀬彰)

Text by Sho KABUMI / Photo by Akira HIROSE

夕映えの4月23日午後6時、中之島ちどり保育園を訪ねた。うえーん、という泣き声。お母さんと園児の笑い声…。ちょうどお迎えの時間だった。

## 神様の通る道

「お迎えですか」

おしゃれな外観の門扉のそばで、男性に声をかけられた。

「いや、ちょっと取材で…」

男性は「あっ、そうですか」と微笑んで、事務所まで案内してくれた。

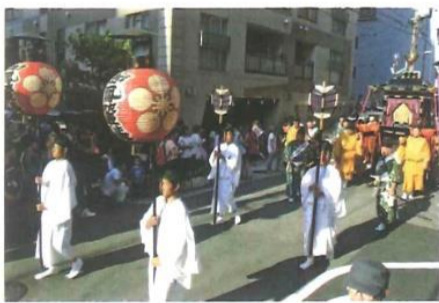
(この男性が、神様の通る道を守っている警備の方に違いない)

実はその3時間前、保育園を訪ねていた。そのとき、園長の小林操さんが、園の前の道についてこう話した。

「地域の方がとても大切にされている『神様の通る道』なんです。保育園も共に大切にしていきたいという思いを込めて、警備担当者を含め、職員みんなで毎日、見守っています」

大阪天満宮は、歩いて10分。夏の天神祭のとき、この道を天神さんの御神輿が通る(写真下)という。だから、神様の通る道なのだ。「警備員」と聞いていたので、制服姿のいかつい男性かと思ったが、普段着の優しい人だった。

「天神さんは、中之島公園と並んで園児たちの絶好の散歩スポットです。お参



りの人たちから『かわいいね』って声をかけられます」

少し遅れて姿を見せた松本麻衣子さん。神様の通る道の話になると、目を輝かせて加わった。

## 27歳の迷い

中之島ちどり保育園は、社会福祉法人「晋栄福祉会」が待機児童解消をめざして、2014(平成26)年6月に開園した。定員は0歳児から5歳児まで80人。保育士さんや職員さんら18人が日々、保育に取り組んでいる。

「まもなく、開園1年。あっというまでした」

松本さんは今、0歳児の担当。今年3月までは1歳児を担当していた。旧姓を「榎」という。今年1月に結婚して「松本先生」になった。

「昨年の担当園児で、今春初めて『えのき先生』と呼んでくれた子がいた。成長したんやなあ、と嬉しくなって…」

開園前の話になる。昨年3月中旬夜、大阪市内の1人暮らしの自宅。フローリングの床に正座して携帯電話で話していた。相手は、親しかった先輩保育士。

「6月に開園する保育園がある。今のあなたのままでいいのよ。仕事をしてみませんか」

実はその時、短大を卒業してから6年間勤めていた保育園の退職が決まっていた。東京に行って結婚することになっていたからだ。ところが、婚約者は大阪に転勤に。さて、どうしようか。20分、30分、話は続いた。

「正直、戸惑っていた時に『自分を必要』とってくれたのは嬉しかった。でも、すぐには決断できませんでした」



0歳児の保育に笑顔が絶えない松本麻衣子さん、円内の写真は園長の小林操さん

## 心のふるさと

後押ししてくれたのは、高校時代の恩師だった。母校は、大阪府松原市にある。高校時代は、軽音楽部に所属してドラムをたたいていた。

なんでも言える顧問の先生が2人いた。先輩との「正座の電話」から1週間ぐらいが過ぎたころ、母校を訪ねた。

「なんとなく保育士になって、なんとなく仕事をしてきた。転職を考えた方がいいのかな…」

恩師は言った。

「えのき、なんとなくやっているのでは6年間できへんで」

「保育士は、おまえの天職や」

心の霧がすっと晴れた。履歴書を書いた。すぐドキドキしながら。面接とか試験とか、久しぶりだ。

5月の第2週に、ちどり保育園の面接

があった。小林園長は、その時のことをよく覚えている。

「かわいい体の中にステキなパワーがたくさんつまっている人だなと思いました」

実技はピアノ。そして作文。無事、採用された。

そして6月1日。「えのき先生」は、57人の子どもたちを、木のぬくもりにあふれた部屋に迎え入れた。

「私が高校を心の居場所と思っているように、子どもたちも『ちどり』を心の居場所と思うようになってくれたら…」

タワーマンションや商業ビルが林立する都会の一角。そこに佇む、小さな素敵な保育園で、「中堅」と呼ばれるようになった松本さんは、大きな夢を描く。子どもたちやパパ、ママ、地域のみなさん、そして職場の仲間たちといっしょに…。

## 現場の工夫

## 色んな葉っぱ

新しい年度を迎えた時、松本麻衣子さんは心がけることがある。

「大人であっても子どもであっても、初対面は初対面。まず自分を好きになってもらおう。そして、人として向き合っ、信頼関係をつくっていこう」

そこから1年が始まる。

「泣くことを受け入れよう。ママとパパが1番いいよね。泣いて当たり前やん。端っこでずっと見ている子もいる。泣かないほうが気になるな」

「朝、泣きながら来るかな。土曜、日曜をはさんだら不安。でも、おはよ

うとって抱き着いてきてくれる子も。ホッとする。自分から保育園の部屋に入ってくれる。うれしいな」

現場の話になると、まるで機関銃。「生粋の浪速っ子」の面目躍如だ。そして、こんな話もしてくれた。

「給食の時、イスにすわらなかつたり。机をバンバン叩いたり…。でも0歳や1歳だったら、『ダメよ』と叱ってもわからない。きっと楽しんでやっているとと思うので『ダメよ』ではなく、机をたたく手を止めてもらうために、『きらきらきらきら 手は お

ひざ…』と歌う。そんな楽しさの中から、マナーや生活のルールを覚えていってもらえたらいい。小さい子どもたちは『楽しさ』からしか、いろんなことを覚えられないんじゃないかなと思っているの…」

そして、ちゃんとできたら「すごいやん。めっちゃかっこいいお兄ちゃんになったなあ」とほめる。

もちろん、とてもひどい、痛い事をしたときは真剣に叱る。「痛いことしたら、こんなん、なるねんで。痛いことしたら、悲しくなるやろ?」と。

でも、長い目で見る。「1年後にちゃ

んとできたらいいな、と思います」。

伝える大切さ、も感じている。お迎えでお母さんに会った時、必ずワンエピソードを入れて様子を伝える。

「大切なわが子をあずけるお母さんは、みんな不安だろうなと思います。どれだけわかってもらえるか。でも、伝えていくしかない…」

子どもたちの心に、色んな葉っぱが芽吹いて、色んな葉っぱをつけた大きな樹が育つ。その道程に、保育士さんたちの「色んな工夫」がある。